

「こっちも抜けないんだよ！」

文字通りがんじがらめになったところで、子どもたちは自分たちが囲まれたことに気づいた。七つの人影が。四方から近寄ってきたのだ。

それはあの海人たちだった。近くで見ると、彼らがどれほど背が高く、たくましいかがよくわかった。いれずみを入れた顔は猛々しく、太い銚の切っ先が、ぎらぎらと輝いて見える。

アリュューシャは胸がどきどきした。これからどうなってしまうのだろう。振り返ってみれば、コヌンの顔は真っ赤で、目には敵意がみなぎっていた。

「何するんだよ！」

わめく少年をさえぎり、アリュューシャは作法にのっとって男たちに声をかけた。

「あたしたちは森の民、シャン族の者です。あなた方は森の民ではないのでしょうか、ちゃんとした立派な人たちだとお見受けします。それなのに、いきなり獲物を扱うように網を投げるなんて。あんまりな仕打ちです。これはどういうことですか？」

ひととき立派な風貌の男が、言葉を返してきた。

「無礼を許してほしい、森の子どもたちよ。だが、一昨日のように逃げられては困るのでな。無礼を承知で捕まえさせてもらった。ああ、危害を加えるつもりはない。ただ君

たちの話を聞きたいのだ」

太くのびやかな声だった。こちらを従わせる力と包容力にあふれている。この人は信頼できる人だとアリュューシャは直感したが、コヌンはそうは思わなかったようだ。鋭い声で叫んだ。

「話を聞くのに網を使うようなやつらになんか、何も話すことなんかないよ！」

「網を使った理由は今言ったはずだ。逃げられては困るからだ。一昨日はなぜ逃げたのだね？」

「そんなこと、関係ないだろ！」

礼を欠いたコヌンの態度に、アリュューシャは冷や冷やしただ。まったく、今のコヌンはどうかしている。彼の無礼をおぎなうために、慌てて言った。

「森の中に海の民がいるなんて、ありえないと思ったからです。魔物が化けているのかもと思って逃げたんです。だいたい、どうしてあなたたちがここにいますか？」

今度はアリュューシャのほうから切り返した。男はうなずいた。

「いいだろう。事情を話そう。だが、その前に網をはずす頼むから逃げないでくれ。いいね？」

男がうなずきかけると、年若の男が子どもたちにかぶさった網に手をかけた。くいくいと手を動かすと、あれほどからみあっていた網があっさりはずれた。